# モンスターハンター【乱風の狩人】

壺仮面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター【乱風の狩人】

【Ｎコード】
Ｎ７２７３Ｚ

【作者名】
壺仮面

【あらすじ】
いきなりユクモ村へと赴任することとなった新人ハンターのユウム。
街で頑張ると意気込んだところなのにいきなり実家に近いユクモ村へ！？
どうにもこうにも納得はいかないが、とりあえずユクモ村へと向かうことにしたユウム。
彼はどのように成長し、どのような仲間と出会うのか。
そんな物語。

## プロローグ　～嵐の中の雷光～（前書き）

こんにちは。壺仮面と申すものです。
今回初めての投稿となります。
モンハンの二次創作モノとなりますが、どうか楽しんで下さると嬉しいです。

## プロローグ　～嵐の中の雷光～

朝霧につつまれた山河は何も語らず
原始より続く、生命の営みを見守る

紅葉に色づく木々は大地を彩り
高き太陽と共に、来訪者を向かえ

黄昏に染まる廃屋は
閑寂のまま、自然の驚異を語る

月影が水面に佇む頃
やがて深緑の森の主は、梢の彼方より姿を現す

狩人は往く、本能に身を委ね、主たる誇りを力を示さんと
狩人は挑む、持てる全てを賭して、その本懐を遂げんと

獲物を見据え、地を駆ける狩人

交わりし雷光の行方は、ただ風のみぞ知る――

――――雷牙の王の伝承より

「山を登るのは案外しんどいな……」

次からは竜車代ケチるのは止めておこうと強く思ったところで濃い霧の切れ間からユクモ村が見える。

「あそこか、俺の拠点になる場所は」

普通ならここでやる気が出るところだが、今回ばかりはそうも行かない。何せ実家に近いのだから、と。新人ハンター、ユウム・ヴァイツはなんとも言えない気持ちになる。

彼は最近街で教習を追え、ハンターとしてようやく認められたところである。これから腕を磨こうと意気込んでいたところにユクモ村への赴任命令。

どうやらユクモ村がハンターを求めているらしい。本来なら街のある程度経験を積んだハンターが赴くところだが元々ユクモ村はハンターが湯浴みついでに狩りをしに立ち寄ることが多いところ。それならば早急にハンターを送る必要もなく、また実家がユクモ村に近いユウムへと白羽の矢が立った。実質街をモンスターから守るためにハンターが必要な為、まだ経験の浅い新人ハンターを送ろうということになったらしい。

それに関してのお詫びなのかギルドからハンターシリーズ一式が送られて来た。チェーンを早々に卒業したのは嬉しいが、実家に近い村に赴任となるとなんとも言えない気分である。

そんな風に悶々と考えながら歩いていると、頭の天辺にポツリ、と冷たい物が落ちてくる感触。

ふと、顔を上げ空を見上げると……

――ザァァァァ……

一気に雨が降ってきた。

「やっぱり振ってきたか」

ヘルムと言えどもハンターシリーズのものは頭の天辺が覆われていないので立待ち髪が濡れ、毛先から水滴が落ちる。
そんな時、後ろからゴロゴロと何かが転がる音がした。振り返ってみるとどうやら荷車のようだ。竜車ほど大きくなく、小さな物だ。
丸っこいモノが荷車を引っ張っている。
雨のせいでよく見えなかったが近づくにつれてそれが何かわかってくる。どうやらユクモ村周辺に生息しているガーグァのようだ。ユウム自身も実家で飼っていたことがある。それを操るのはアイルー。
あちらもユウムの姿を確認するとユウムの直ぐ隣で荷車を止める。

「ハンターの旦那！　この道を通ってるってことはユクモ村を目指してるのかニャ？」
「あぁ、そうだよ。君もか？」
「そうだニャ。丁度ユクモ村に戻ってたところだニャ。そうだニャ、こんな雨が降ってるなかびしょ濡れで歩きたくないだろうニャ。荷車に乗るといいニャ！」
「いいのか？」
「大丈夫だニャ、乗せてた物は向こうで売ったからスペースはあるニャ。それにハンター一人程度でガーグァもへこたれたりしないニャ！」

どうやらアイルーの商人と言ったところらしい。

「すまない、お言葉に甘えさせてもらうよ」
そう言って背負っていた鉄刀を荷車に乗せ、自分も乗り込む。
「それじゃ、出発ニャ。荷物の中に笠があったはずニャからそれをかぶってるといいニャ」
アイルーにそう言われ荷物を少しあさると赤で装飾された笠を見つけ、それをかぶっていることにした。
なるほど、これは雨が凌げて顔にも雨粒が当たらなくていいかもしれない。と一人頷いた。

しばらく山道を進み、下り坂へと差し掛かってきた頃だった。
ふと空を見上げると、何か雲が渦巻いている。その渦の中央にいるのは……
「龍……？」
「ニャアアアア！？」
アイルーの叫び声に気がつき、振り向くと目の前には体を青白く光らせ空を見上げる何かが居た。
次の瞬間、ガーグァがパニックに陥ったのか荷車が大きく左に傾く。
その拍子にユウムは投げ出され、鉄刀も一緒に放り出される。

荷車はなんとかバランスを持ち直しそのまま走り去っていく。
目の前には巨大なモンスター。強靭そうな四肢を持ち、平たく長い尻尾。どうやらこちらには気づいていないようだ。どうやら空にあるあの渦に気を取られているようだが……。
とりあえずここから離れるのが先決だろう。そう判断したユウムは素早く立ち上がり、近くに放り出されてあった鉄刀を拾い上げる。
下の道を見ると丁度あの荷車がもうスピードで走っているところだ。

「上手くいってくれよ……」

そう呟くとユウムは荷車に狙いをつけて今いる道から飛び降りる。

――ガシャッ！

荷車が少し揺れ、アイルーが物凄い勢いでこちらを振り向く。

「旦那！　無事だったんですかニャ！」
「な、なんとかね……」

目立つ外傷はないし、どこか打ち付けてもいない。一応はハンターとでもいったところだろうか。

「ユクモ村まではもうすぐですニャ。さっきみたいにモンスターが現れるのは稀なことニャから安心するといいニャ」

アイルーは再び前を向き、ガーグァを操る。
ユクモ村までもう少し。村に着く前に大きな怪我がなくてよかったとユウムは息を大きく吐きながら呟いた。

## プロローグ　～嵐の中の雷光～（後書き）

冒頭のアレはそうですね。
３ｒｄの説明書に出てくる奴です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7273z/

---

モンスターハンター【乱風の狩人】

2011年12月24日03時46分発行